

## 第1章 共感的つながりをつくる

### 第1節 人間関係を構築する学級開き

#### 1 はじめに

私は1990年度から1999年度までの10年間、板野中学校において学級担任をしてきた。最初の学級は2年B組（1990年度）であり、次は3年B組（1991年度）であったが、それは全体学習を通して道徳学習や人権・部落問題学習のあり方を追究していく営みであったと言える。

そして、その2年間を検証するように、3年B組（1992年度）、3年A組（1993年度）と3年生を続けて担任する。それは全体学習が学校全体のものとなり、その取り組みが徳島県内外に大きく広がっていった2年間と言える。

1994年度からの6年間は、同じ学年を中学1年、2年、3年と2回持ち上がることができた。それは、それまでの全体学習を土台とした道徳学習や人権・部落問題学習の実践から、その具体的な方法論を検証していく営みであったと言える。その6年間で振り返りながら、共感的つながりをつくる学級集団づくりのあり方を提起したいと考える。

最初に、中学1年から3年まで持ち上がった学年のスタートは、1年A組（1994年度）であった。1994年度は、私の娘（長女）が小学校1年に入学した年であり、期待と不安の中で板野中学校に入学してきた中学1年生の姿と娘の姿が、私にはそっくり重なり、新鮮な感動の中で生徒たちとの出会いを迎えるようになる。

1994年度には、全体学習が板野町内の小学校の中にも浸透しており、入学してきた一人一人が小学校で取り組んだ全体学習を誇りにしており、中学校においてもその取り組みをより確かなものにしていくという目的意識を持っていた。そんな生徒たちの生き生きとした頑張りを引き出し、小学校との連携を深めていくために、1学期早々に実施した第1回目の全体学習には、小学校6年時の担任の先生方に参加していただいた。

その全体学習において、小学校の先生と共に取り組んだ小学校での全体学習に寄せる思いを語り、小学校の先生を尊敬していると言い切る生徒の姿に、共感と連帯の絆を深め、信頼と尊敬の中で営まれていく教育の可能性を実感する。

そして、その第1回目の全体学習は、中学校での教育実践の土台となり、生徒一人一人が生命輝く教育を主体的に実践していくことにつながっていくのである。

また、その1994年度は、徳島県で第46回全国同和教育研究大会が開催されることになっており、その開会行事で私が、全体学習の取り組みを中心に特別報告をさせていただくようになっていた。そのような状況の中で、大会前日に板野中学校全校生徒による全体学習を実施するが、その全体学習においても、2年生や3年生に精一杯の思いを伝えていく1年生の姿があった。

その生徒たちを2年C組（1995年度）、3年E組（1996年度）と担任していくが、それは一人一人の生徒が、自己をみつめ、語り、他者とつながる授業実践を通して、人間としての輝きを放った3年間であったと言える。今もその生徒たちとの様々な教育活動がよみがえってくるが、そんな生徒たちの生き生きとした姿を象徴する学級歌を掲載する。

【学級歌・歌詞】2年C組学級歌「昨日の自分より今日の自分が好き」（曲「カローラIIにのって」より）

2年C組元気で にぎやかなクラスだけど  
でかい身体の先生に 頭あがらない  
友だち思いのやさしい イイヤつばかりなのに  
勉強キライで苦手 それがたまにキズ  
いつも笑顔を忘れず 自分を輝かせる  
そんなステキな生き方 できればいいね

昨日の自分より今日の自分を好きになろうよ！

口笛をふきながら 泣きたくなればこらえて

（口笛）…………… わらっちゃおう

しぶい森口先生 ホントは30代

だけどまだまだ気持ちは 20代のまま

こんな2Cの仲間たち きっと一生不滅

大きな夢に向かって どこまでも行きたいな

ずっとずっとどこまでも 道はつづくよ

※ 大きな夢に向かって ラララ ララララ ラララ

ラララ ララララ ラララ ララララ ララ

<※くり返し>

【学級歌・歌詞】3年E組学級歌「バンザイ」ークラスの連帯を求めてー（曲「バンザイ」ウルフルズより）

イエーイ 3Eになれてよかった

この気持ちは、すごくメチャクチャハッピー

バンザーイ みんなに会えてよかった

このままずっとずっと 楽しくやろう

うちのクラスは明るい けど一つ欠点がある

授業中うるさくて先生を困らせたことがある

すげえすげえクラスにするには、考えた級訓を思い出そう

自分がわからなくなったら「自問自答」しよう

つまらないクラスにはしたくない

最後の学年だから、楽しい思い出をつくろう

だから、みんなそばにおいでよ

イエーイ 3Eになれてよかった

この気持ちは、すごくメチャクチャハッピー

バンザーイ みんなに会えてよかった

このままずっとずっと 楽しくやろう

様々な感動の中で展開された3年間の教育実践を検証するように、再び中学1年から3年までを担当したのは、1997年度からである。

そのスタートは1年A組(1997年度)であり、私はそのクラスの生徒を文部省指定の同和教育研究推進校であった日和佐中学校に連れていき、そこで授業を公開し、日和佐中学校の全校生徒と共に全体学習に取り組んでいる。その取り組みは翌年の2年A組(1998年度)にも継続され、再び日和佐中学校で授業を公開し、全体学習を実施するようになる。

そんな取り組みが様々な花を咲かせていくが、板野中学校における最後の学級となった3年A組(1999年度)では、日常の授業も頻繁に公開するようになり、一つ一つの授業を思いっきり楽しむ生徒の姿に、私は教育の「よろこび」を思い続けてきた。

特に日和佐中学校と同じように、文部省指定の同和教育研究推進校であった小松島市立江中学校と実施した交流全体学習、全日本中学校道德教育研究大会京都大会で公開授業を実施することになっていた京都市弥栄中学校で実施したジョイント人権学習は、道德学習や人権・部落問題学習の本質に迫っていく学習として様々な問題を提起するきっかけになったと考えている。

そんな10年間の様々な公開授業に出会っていただいた先生方から、「生徒たちは学年のどの時期になると生き生きと自己を語っていくようになるのか」という質問を受けた。私はその質問を受けるたびに、私は「4月のスタート、学級開きの授業からです」と答えてきた。

それは学級開きに実践する道德学習からであるが、その学級集団づくりに関わる具体的な4月の道德学習から、その取り組みがそれ以後の様々な教育実践の中に生かされていくことを検証することにする。

## 2 学級開きの語り

生徒との最初の出会い、学級開きの日に語ってきた言葉がある。その出会いの言葉は、「人(他者)を大切にする」ということであり、「人(他者)から大切にされる」ということである。また、それは「人(他者)を人として認めることにより、自分(自己)が人として認められるようになる」ことである。そして、このことは「人(他者)の話をしっかりと目(心)で聞く」ことにより実現されると訴えてきた。

この「人(他者)の話をしっかりと目(心)で聞く」ということは、「その人(他者)を認める」ということであり、「その人(他者)から認められる」ということにつながる。この基本ができている生徒は本当に強い。今、全国各地で学校教育をめぐる様々な課題があるが、その根本は人間的つながりをつくる基本である「話を聞く」ことが、できないことに大きな原因がある。

特に、「学級崩壊」という言葉が頻繁に出てくるが、それはしっかりと物事を学び合っていく生徒相互の関係性が成立しないということである。「話が聞ける」ということ、「話は目(心)で聞く」ということを日常的に実践していくことができる生徒は、人間としての生き方を主体的に追究していくようになるのである。

そんな確かな目覚めや成長を促す出会い、学級開きの語りの底に流れる思想は、すべての学年に共

通するが、中学1年生の教室を想定して、その場면을説明していくと以下のようなになる。

中学1年生の出会いは入学式の日である。中学1年の場合、その場に保護者がいるということが、教師にとって教育を教育として機能させていく大きなチャンスになる。

入学式の日、一人一人の生徒は、まさに期待と不安の中で中学生として初めて校門をくぐり、自分の教室に入る。板野中学校には3つの小学校から生徒が入学してくるが、その生徒たちは複数の教室に分かれることになる。「あの子とだけは、同じクラスになりたい。あの子とは…」といろいろな思いで教室に入ってくる生徒の表情は、生き生きしているが、一人一人の心の中は様々である。

大切な友だちと同じクラスになれた生徒もいるが、親しい友だちが一人もいないと不安いっぱい表情になる生徒もいる。中には家の都合で初めてこの町（板野町）に来た生徒もいる。「友だちができるだろうか」「楽しくやっていけるだろうか」という思いの中で揺れながら、生徒たちは初めての席に着く。

私はそんな生徒たちの思いを噛みしめるように、一人一人の生徒に精一杯の笑顔で語り出す。それは、冒頭でもふれたが、「人を大切にする」ということであり、「人を認める」ということである。そして、そのことを具体的に語り出す。

「人を大切にするということ、人を認めるということは、その人の話をしっかりと聞くということである。話は目で聞く。目は心、身体全体を目にしてしっかりと話を聞く。それは人を大切にし、自分自身を大切にするることにつながっていく。」

この言葉に私の精一杯の思いを込めて語っていくが、その場面は学級担任として、最も充実感を感じる瞬間である。

4月の出会い、4月のスタートは、中学1年生も2年生も3年生もやる気になっている。そのやる気と緊張あふれる出会いの中で、本気で話を聞くことの重要性を感じ取った生徒は、入学式を迎える。

入学式において生徒たちは、校長先生の話や来賓の方々の話をしっかりと身体全体を目にして聞き、そのことによって、「話を聞く」ということが、自分自身を豊かにしていく事実を生徒たちは、体感するのである。

その入学式を終えた生徒たちが、教室に帰ってくる。ここがポイントになる。教室に帰ってきた生徒たちを間近に取り囲むように、その入学式に参加した保護者全員に教室に入ってもらおう。生徒の机を詰めた状態で、全員の保護者にもれなく教室に入っていたかくのである。

中にはお父さんとお母さん、両親揃って来ていただいていたたり、おじいちゃん、おばあちゃんに来ていただいていることもある。全員が教室に入ると、教室全体が独特の雰囲気になる。入学式の日というのは、保護者の方々も正装であり、教室全体が異様な熱気に溢れる瞬間である。

私はその雰囲気や熱気を楽しむように、生き生きと、そして、ニコニコと語り出す。それは入学式に入るときに語った言葉の確認からである。

「人を大切にするということ、人を認めるということは、その人の話をしっかりと聞くということである。話は目で聞く。目は心、身体全体を目にしてしっかりと話を聞く。それは人を大切にし、自分自身を大切にするることにつながっていく。それは、しっかりと話を聞くことができた入学式の皆さんを象徴する言葉です。」

こういう語りから始まる。そして、「話は目（心）で聞く」という言葉が、教室全体に響いたとき、生徒や保護者の強烈な視線を感じ、そのまなざしに精一杯の思いを返しながらか人間関係の「よろこび」について語り出す。それは次のような語りである。

【みんな、人間は、幸せになる権利がある。みんなは、幸せになるために生まれてきたし、幸せになるために今を生きている。だからこそ、そんな人間関係をこのクラスの中につくっていき。現実の、社会の中にある差別もいじめも、我々の人間関係の中で起こっていく。

人間関係がさわやかな清流が流れるように清らかに澄んだものだったら、その集団は楽しい。生きてることがうれしい仕方がないものになり、毎日が本当に充実する。でも、人間関係がいびつになって、心と心の交流がうまくいなくなったら、いじめられたり、バカにされたり、泣きたくなるような、もう死んでしまいたくなるような蔑みを受ける人間が生まれてくることになる。

みんなは、このクラスの中に、どんな人間関係をつくる。自分さえ嫌な思いをせんかったらいい、自分さえつらい思いをせんかったらいい、そのことだけで毎日を送るんか。それとも、ここで出会えた仲間と、思いっきり力が合わせられて、安心して自分の気持ちが言える、わからんことがわからんって言える、どうしたらこれわかるんだろう、どうしたらこれできるようになるんだろうという思いがしっかりと語っていき、そして、みんながみんなのために一生懸命教えてくれる。そんな関係をみんなで作っていき。】

私の精一杯の語りである。この言葉は、「話は目（心）で聞く」ということが、どんなに素敵なことかを実感している生徒や保護者にじっくりと響いていき、様々な感動が教室に広がっていく。その中で、ある保護者は、目を真っ赤にされ、熱い視線を送ってくれるが、私はその視線に私の思いを思いっきり返すように語っていくのである。

### 3 生活を綴るよろこび

学級開きの語りから学級集団づくりは始まっていくが、その熱い感動を共有しながら、私は教室全体を包み込むように、私の語りを続ける。

【一日の終わりに、今日の自分どうだったのか、友だちとのこと、みんなの家族とのことをしっかりとみつめていき。

「今日A君に、ポロッと嫌なこと言った。A君、いつもは『へへ』って笑うのに、今日は笑わなかった。何で、僕はこんなこと言ったんだろう。」

「今日、私、家に帰った時、おばあちゃんに食ってかかった。おばあちゃん、寂しそうな顔しよった。何で、私はこうなんやろう。」

その日その日のいろんな人との関わり、友だちとの関わり、家族との関わりを自分に問いかけていき。そのことを「自問自答」と言う。その自問自答した思いを、その事実を、毎日の生活の記録（以下・生活ノート）にしっかりと綴っていき。みんなは毎日成長する。毎日豊かになる。

毎日友だちを大切にしながら、家族を大切にしながら、いろんな人から大切にされながら、人間として大切なことを学んでいくことになる。そういう毎日があつてこそ、1時間1時間の授業の中で安

心して自分が出せる。思いつき成長していく自分自身をつくっていくことになる。】

この語りは、すべての教育の根幹に関わっていく訴えである。中学校になったら、英語の学習が始まるが、この語りが生徒一人一人の中に届いたとき、思いつき英語の発音ができる関係をつくることにもつながっていく。現実には、大きい声で、先生に合わせて思いつき発音したら、ちゃかされたり、馬鹿にされ、おどおどしながら授業を受けるようになる生徒の姿があるかもしれない。しかし、思いつき自分が表現できる「安心のある人間関係」がクラスの中に機能していくと、誰もが安心して思いつき発音できる英語の学習を成立させることにつながるのである。

このことは、すべての教科学習に共通する。それは、音楽の時間、みんなが思いつき歌が歌える関係をつくることであり、理科の実験で何をしているのかわからなくなったとき、わからないことが安心して聞くことができ、数学の問題がどうしてこういう答えになるのかわからないとき、先生や友だちに安心して質問できる関係をつくる営みである。まさしく差別やいじめのない関係というのは、人間が人間として豊かに生きていくことができる人間的つながりを築いていくのである。

そして、お互いの存在を大切にしながら、自分自身を豊かにしていくつながりは、毎日の生活の中にある。それは、家族との日常であり、学校での給食の時間、みんなで協力して配膳したら、すごく楽しかったという瞬間であり、掃除の時間、一生懸命床をふいてたら、友だちも一生懸命床をふいていたことをすごくうれしく感じる瞬間であったりする。

そういう日々の思いをじっくりと自分に問いながら、生活ノート綴っていく。そういうやり取りがあって、生徒は主体的に自己の生き方を問い、成長していくようになるのである。

4月の最初からそんな生活ノートの営みが始まる。私は、毎朝提出される生活ノートを見るのが楽しみで、夜寝る時にも、翌日の生活ノートのことを考えるとワクワクする。朝、学校へ向かう車の中でも、学校が近づいたら、ついつい顔がにやけてくる。ルームミラーを見て、「ちょっと顔しめていこう」と思うが、すぐに顔が緩んでいく自分がある。

学校に着くと、職員室に荷物を置いて、すぐ教室に向かうが、そこでも教室が近づいたら顔がにやけてくる。「今日はしめていくぞ」と思って教室に入るが、教室に入った瞬間、顔が完全に緩んでいる。そんな私の顔を見て、生徒が言う。

「先生、何がうれしいん？」

「お前の顔を見るんがうれしいんや。」

そんなやり取りが毎日交わされる。そんな中で、生活ノートを読み始めるが、生徒の視線を思いつき感じる。私は生徒の視線に力をもらいながら、一つ一つの文章を読み味わっていく。本当に心地よい瞬間である。

そして、その生活ノートの感動を一人一人の生徒に様々な場面で語っていく。廊下ですれ違ったとき、掃除の時間、給食の時間、休み時間のちょっとした場面で、さりげなく語る。

「今日の文章、こんなこと思ったよ。胸一杯になった…。」

時間にして1分にも満たない時間であるが、その瞬間お互いの中に笑顔が溢れる。そういうやり取りが、楽しくて、うれしくて仕方がない。まさしく一人一人の生徒の輝きに力をもらって生きていることを実感するひとときである。

#### 4 参観授業への呼びかけ

入学式の日、保護者の一人一人に一つの約束をする。板野中学校は、4月20日頃にPTAの総会があり、最初の参観授業が実施される。その授業で、生徒一人一人が、仲間とのつながりを語っていく道徳学習を実施するが、その参観授業に寄せて、教室いっぱいの保護者にこういう約束をする。

「4月〇日（20日頃）に参観授業があるんです。ほんとに来てよかったという授業をします。むちゃくちゃ楽しい授業をしますから、必ず来てください。」

こう言い切ることにより、私も生徒も保護者も、その授業への思いを豊かにする。そして、何よりその思いが、その授業は本物に近づいていくのである。

また、その訴えに重ねて、こう語りかける。

「その参観授業について、皆さんと約束の一つしましょう。参観授業の時も、子どもたちは、今の席で授業をするようになりますから、参観授業の日も、今日、皆さんが立たれている同じ所に立って、授業を見てやってください。そうしたらいいことがあるんです。」

そんな問いかけが教室に広がったとき、保護者の視線が私の方に集中するが、その次の瞬間、私は穏やかに言葉を吐く。

「そうすると、誰が来ていないかすぐわかるんです。（笑）」

この言葉が教室中に広がり、教室中に保護者の笑顔が溢れ、何ともいえない暖かい雰囲気教室全体に広がる。また、ニコニコしながらそのような思いを伝えることにより、参観授業にはほとんどの保護者が来てくれるし、来れない場合は電話をくれる。そこでまた人間関係を深くするのである。

教師と保護者の関係とはつながればつながるほど、言い難いことを素直に言い合える関係、安心して話ができる関係を築いていくことになる。それは生徒を介して、私と保護者が共に幸せになっていく営みである。

保護者と教師が信頼し合い、認め合って大切にしている関係にならなかつたら、生徒の中に本物の幸せを築くことは難しい。共に出会えてよかったと思える関係をまずつくっていききたい。それが学級開き、入学式の日にした私の願いである。



1994年度板野中学校1年A組 於・徳島県立牟岐少年自然の家